

2022年1月2日 説教「御霊によって歩みなさい」

ガラテヤ人への手紙 5章 16~26節

ガラテヤ人の手紙はガラテヤの教会に宛てられた使徒パウロの書簡です。この書のテーマの一つは「律法と福音」です。救いは行いによるのではなく信仰によると言っても良いです。今朝の聖書箇所は、そうした論述の結論にもなっているともいえます。



1. 御霊によって歩む (16~18節)

- ①御霊によって (16) 「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」これまでの論述を受けての、具体的な命令です。「御霊によって歩みなさい」。キリストを信じた者たちの内には御霊が宿るのです (Iコリント 3:16)。御霊はキリストにある者たちの助け主です (ヨハネ 14:16)。御霊は導き主でもあります。相談相手でもあります。ですから、御霊によって歩くことは、生き生きとした信仰をもって歩くことなのです。御霊に導かれつつ、完全に歩調を合わせて歩むならば、肉の欲望を満足させるようなことはないというのです。ここでは欲望が否定されているわけではありません。正当な欲望はあるのです。本来もつべきではない肉の欲望のことを言っているのです。
- ②肉と御霊の対立 (17) 「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」「肉」というのは、人間の生まれながらの罪に支配された性質です。アダムより引き継いだ神との断絶関係に基づいています。ですから、自ずと肉の願うところに従って歩むならば、それは神の御霊の向かわせる方向とは異なりぶつかってしまうのです。ですから、もしどちらにも色目を使うようにして歩いていくなれば、身動きできなくなってしまうのです。
- ③真の自由な行い (18) 「しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。」しかし、心を決めて御霊に導かれながら歩いていくなれば、主の喜ばれる道を進むことができ、真の自由な行動ができるのです。そして、その道はかつて旧約の民が律法の支配のもとにはおかれなかったのです。御霊の支配の下にありますから、真の自由を与えられて、生きていくことが許されていくのです。

2. 肉と御霊の結実 (19~23節)

- ①肉の行い (19~21) 「肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。」生まれながらの性質である肉の支配のもとに歩むならば、その行いは当然、御霊に逆らうことを行うこととなります。肉の支配のままに進むならば、生じてくるのは列記されているようなものです。

心当たりがあるという項目も少なくないかもしれません。これらは、内に潜んでいることもあります。何かがあると露呈して、人間関係や集まりなどに問題を起こすこともあります。ともかく、これらは人間のうちにしぶとく働くのです。

- ②こんなことをしている者は(21)「前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」「こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」とは厳しいお言葉ですが、これぐらい言われないとなかなか、自分の姿に気が付かず、悔い改めもしないのです。肉の性質はそれほど強いのです。
- ③御霊の実(22~23)「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」一方、御霊に導かれて歩む者に与えられる結実はどんなものでしょう。「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、柔和、自制」。これらは、御霊の実ですから、自力で作上げるものではありません。ぶどうの枝は木につながってこそ実を結ぶのです(ヨハネ15章)。人格者を目指す道に人格はなく、御霊によって歩いていくときに、知らないうちにこれらの実がついてくるのです。御霊の実は麗しく明るい人間関係をもたらします。

3. 十字架の主に(24~26)

- ①肉を十字架につける(24)キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」この段落においては、はじめてイエス・キリストが出てきました。「キリストにつく」というのは、キリストに属するとか、キリストのものとなるという意味です。そういう人は、生まれながらの肉を、十字架につけてしまったのだとあります。イエス様は、私の肉のためにも死んでくださったのですねと伝えながら、我が肉のためにも、身代わりとなって十字架にかかってくれたことを信じていくのです。
- ②御霊に導かれ(25)もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」御霊によって生きるというのはどういうことでしょうか。少なくとも御霊を意識して生きることです。そして、御霊の導きを信じることです。そして、御霊の導きに従って進んでいくことです。
- ③挑みあわず(26)互いにいどみあったり、そねみあったりして、虚栄に走ることがないようにしましょう。」ここにどうして、肉の働きの一部が出てくるのでしょうか。互いに挑みあう、嫉みあう、虚栄に走るといえるのは、キリストの交わりを壊しやすいからでしょう。挑みあわない、嫉みあわない、虚栄に走らないことを心にとめていく事

は特に覚えておけというのです。

《結論》

今朝の聖書箇所は、今年の姉ヶ崎キリスト教会の目標とする御言葉です。「御霊によって歩みなさい」。一年かけて、いろいろなかたちで学んでいきたいと考えていますが、大きなスケッチだけはしておきたいと思えます。

この御言葉をより深く理解するためには、ガラテヤ人への手紙の全体を読んでいく必要があると思われませんが、あまり情報を多くするとわかりにくくなってしまうので、わかりやすくまとめていきたいと思えます。

「御霊によって歩む」というのは、イエス・キリストを信じ、いつもその方を覚えて歩むことと同義であると言ってもよいと思えます。パウロはガラテヤ書2章20節で「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」と述べています。キリストが自分のうちに生きて働いてくださっていると証しているのです。それは、御霊によって歩んでいることと同じことです。

御霊は元の言葉ではプニューマというのですが、風とも訳せる言葉です。イエス・キリストはユダヤ人議会の議員であったニコデモに、新しく生まれることを教え、風が吹いていることを、人は見えなくても感じ取っていることを伝えた上で、御霊の風が吹くと信じた者のうちに、見えなくても本人はそれを感じているのだと伝えてくださっています。このことから言えることは、「御霊によって歩む」というのは、実感を持ちにくいと思われませんが、イエスキリストを信じ委ねて歩いていくと、御霊が働いてくださり、ことがなされていくということを通して、御霊の働きを実感しやすくなるのです。

御霊の働きが有効に働いていくと、私たちのうちに御霊の実が結ぶようになります。それもまた、御霊の働きを知ることになります。もっとも、木の実が結ぶのには時間がかかるように、御霊の実が結実するのも時間が必要であることは覚えておきましょう。「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、柔和、自制」といった結実は、その一つでも実感できればうれしいですね。でもその秘訣は、御霊によって歩むことなのです。それは、キリストとともに歩くことと同じ

です。

御霊によって歩むというのは、この聖書箇所にもあったように、肉の問題も絡んできます。一年間、そうしたことも含めて学んでいきましょう。一年たった時には、御霊によって歩むことについて、何かをつかむことができれば、クリスチャン生活が充実する道につながっていくと思われま

自分のことはもちろん、主にある友も御霊によって歩んでいくことができるように祈っていきましょう。教会の中であって、共に御霊によって歩むことにおいて成長が許されていくことは喜ばしいですし、大切なことなのです。それは、この教会が霊的成長を与えられていく道にもなるということ覚えていきましょう。

2022年の歩みが、御霊によって歩むことによって大いに祝福されますように。姉々崎の群れに霊の風が吹いていきますように。